経済学がもっと面白くなる〈情報＆メッセージ!〉

北海学園大学 経済学部報

econ.!

【エコン】

2014.夏・秋号

No.30

特集 地域研修ゼミ座談会

「経済学部イチ押しカリキュラム！地域研修の魅力を語る！」

特集 地域研修ゼミ座談会（2ページ）
西村宣彦先生・大貝健二先生

連載企画 ぶらりゼミ訪問（4ページ）

news1 1部ゼミ対抗ソフトボール大会（6ページ）
大貝健二先生

news 2 市民公開講座（8ページ）
平野研先生
大屋定晴先生
神山義治先生

interview OB訪問―働きマン⑬鈴木康洋さん（7ページ）

news 1 外部講師特別講義
西村宣彦先生（6ページ）

連載企画 研究室の窓から
大屋定晴先生（5ページ）

column From a Distance
一條由紀先生（6ページ）

news 2 経済学会講演会
野崎久和先生（8ページ）

news 2 市民公開講座
川村雅則先生（8ページ）

チーム econ.

世界中が沸き立ったサッカーワールドカップ。サッカープレイヤーのようにチームワークを発揮して、日々経済学部の教育、研究活動に取り組んでいる「econ.No.30」に登場する教員の皆さんです。

特集「経済学部イチ押しカリキュラム！地域研修の魅力を語る！」

「地域研修」は、地域経済学科創設時に、将来の地域の担い手を育てるための実践型の授業として新設されました。10年を経た今、経済学部全体のカリキュラムとして多くの経済学部生が学び、さまざまな成果を生み出しています。

西村ゼミ地域研修報告書

――地域研修の10年を振り返る

●大貝 健二 先生

大貝：本学部で地域研修が始まり10年が経ちました。今日は西村ゼミと大貝ゼミの皆さんに集まっていただき、この10年を振り返りながらこれからの地域研修のあり方を考えていきたいと思います。教員の立場からは地域研修に何を意図しているかがひとつ。また地域研修の魅力を、学生はどのようにとらえているか。今回は研修の経験者3､4年生とこれから関わる2年生に集まっていただきました。事前準備、研修現場での学びが今にどう生きているか。また､2年生には、なぜ？それぞれのゼミを選んだのかということや、地域研修に何を期待するのか、盛りだくさんに聞いてみたいと思います。まず学生の皆さん自己紹介をお願いします。

佐藤：3年、大貝ゼミ副ゼミ長の佐藤将貴です。

道場：大貝ゼミ2年生の道場真帆です。入学時から地域研修を学びたいと思っていました。

西野：2年西野愛由です。西村ゼミで楽しく学んでいます。

高野：4年の高野詩菜です。2013年西村ゼミⅡ副ゼミ長でした。

大貝：地域研修は2004年から地域経済学科でスタートしましたが、西村先生の関わりはいつからですか。

●西村 宣彦 先生

西村：私は地域経済学科が創設された2003年に本学に赴任しました。地域研修は、最初は何をすれば良いか手探りでした。特に決まった形式はなく、「ゼミ生を地域に連れて行く」ということだけ決まっていて、どこに行って何をするかは、各教員に委ねられました。私はそれまでずっと関西で、北海道に土地勘がなかったので、毎年「今年はどこでどんな地域研修を行うか」が悩みの種で、古林先生の地域研修（苫小牧でのサケ定置網漁の体験）に相乗りさせていただいたこともありました。道外での地域研修には足代が出ないといった制約はありましたが、各教員が自分の得意分野や持ち味を発揮しながら実施してこれたことは、地域研修の発展という観点からは、大変よかったのではないかと思っています。

大貝：行き先は特定の地域に固定していますか、それともばらばらですか。

西村：ゼミによって異なりますが、私のゼミでは、毎年異なる地域を訪ねています。学生に色々な地域のことを知ってほしいということと、私自身も色々な地域のことを知りたいというのが、その理由です。ゼミⅠ､ゼミⅡと2年続けて同じ地域を訪ねるのも、1年目見えてなかったことに2年目行って気づくといった経験ができるので、それはそれでいいなと思っているのですけどね。私が研究で通っている夕張市には、間隔を空けながらですが、過去3回、地域研修でお邪魔しています。一度、学生自身に行き先を決めてもらったことがありましたが、これは失敗でした。学生が主体的に面白い地域づくりをしているマチを探してきて、この地域に行きたい！と提案してくれることを期待したのですが、最終候補に残ったのは有名観光地ばかりだったので、それ以来、地域研修のテーマの設定、訪問先の選定、現地との調整については、私の方でやるようにしています。

大貝：私の場合は、最近は私の研究と兼ね合いで2年生は帯広と別海、3年生は道外中心です。地域研修に可能性を見いだせるようになりましたが、やはり準備の苦労は大変多いですね。

――地域研修へののぞみ方

大貝：さてここから、経験してきた人に聞きたいのですが、研修のテーマや事前準備はゼミでどのように進めてきましたか。

高野 詩菜 さん
西村ゼミ●地域経済学科4年

高野：2年に夕張、3年に下川町に行きました。先生から示された文献を輪読して、事前知識を高めるようにして行きました。

西村：西村ゼミは2､3年合同で人数が多いので、研修テーマ・地域に関する論文や、行政資料、町史などを手分けして読み込みましたね。

高野：最初、下川町のことは全く知らなくて､地域研修に行くことが決まってから「環境未来都市」ということを知り、基本的なことをよく勉強してから現地に行きたいと、必死に文献を読みました。札幌に住んでいると、町の面積の9割が森林というのも想像がつきませんでした。現地では、まずNPO「森の生活」の体験プログラムで森の中に入り、肌で森を感じました。立木の価格を推理するゲームでは、木や森の付加価値を高めることの大切さを学びました。翌日は役場でお話を聞いたり、バイオマスビレッジという木質チップ・ボイラーから熱を供給する公営住宅を見学し、そこで暮らす高齢者の方にお話しを伺いました。他にも地域おこし協力隊の指導を受け、トマトの収穫や熊笹刈り、それを粉末加工する体験といった、濃密な経験をさせてもらいました。

佐藤 将貴 さん
大貝ゼミ●地域経済学科3年

佐藤：やはり僕たちも、事前学習は文献を読みました。最初は十勝ってどんな農業をやっているのか話し合いましたが、あまり出て来ない。それでインターネットなどで調べると食糧自給率が1,100％などと出てくる。これは作っているだけなのか。加工とかをして付加価値を付けたらすごいんじゃないかということになり、そこからは下平尾勲さんの『地産地消』という文献も読みました。完全には理解が深まらないままでしたが、実際に現地研修に向いました。

大貝：そもそも私のゼミテーマが「地域経済の活性化とは何か」なので、「食」の問題が取っ付きやすいだろうと文献を選んだのですね。地域内での素材作り、加工、消費と、お金の循環を創り出すことが大事だと学習しました。そこで日本の一大食糧基

大貝ゼミ、㈲十勝しんむら牧場での聞き取り調査

写真① 座談会参加者のみなさん、地域研修の様子②③ 西村ゼミ（下川町）、④ 古林ゼミ（別海町）、⑤ 浅妻ゼミ（芦別市）、⑥ 高原ゼミ（十勝地域）、⑦ 大貝ゼミ（2012 年、別海町）

地である十勝で何が行われているのかを実際にみてみようということになりました。市役所や北海道中小企業家同友会とかち支部の協力を得て農業経営者、中小企業へのヒアリングを中心に調査を行いました。

佐藤：まず、鹿追町の「大草原の小さな家」でのヒアリングを行ないました。ところが、いざヒアリングとなった時に誰も発言しないので、訪問先の方にも「静かだね」と言われて、「変えなきゃ！」ということでミーティングをしました。「こんなことを聞いたら低レベルかな」「こんな基本的なこと聞いていいのか」などのためらいを反省し、わざわざ時間を割いてくれている現地の方々に失礼なことにならないよう、次の日からは、学ぶ身なのだという自覚で取り組みました。楽しさも必要ですが、同じくらいストイックにやらなければと思いました。「五感をフルに使った食」の提供など6次産業化に取り組む「しんむら牧場」や「大野ファーム」は、それぞれ工夫がありました。良質な土からできる牧草を食べる牛の糞は臭くないとか、現地ならではの学びが沢山ありました。

大貝：事前に頭でっかちになりすぎても良くないと思う気持ちもどこかにあるし、その場で初めて聞くことや見ることの印象、その現場で感じたことを頼りにどんどん聞いていくことも大事ですよね。

西村：私はよく「僕らは地域の皆さんに忙しい時間を割いてもらって勉強させてもらいに行くのだから、決してお客さんになるな」と学生に言うのですが、事前に勉強してないと、いざ現地に行っても質問ってなかなか出てこないんですよね。的外れでもどんどん質問を出すバイタリティも大事ですが、よく事前学習をしていると、自ずと聞きたいことが出てくると思います。だからやはり一人ひとりが「みんなについて行く」のではなく、問題意識を持って参加してほしいですね。そうすることで皆にとって有意義な時間になるので。

――地域研修への期待

大貝：2年生はゼミを選んだ理由、地域研修との関連を含め、地域研修でどのようなことをしたいかを聞かせて下さい。

西野：（卒業生で俳優の大泉洋さんと出身高校が同じで、彼と同じ経歴にしようと思い）入学当初は経済学科志望だったのですが、高原先生の地域経済論を履修して、地域経済を学ぶ事に興味を持ち地域経済学科に変更しました。西村ゼミを選んだのはシラバスのゼミ内容を読んだ時に直感でここがいいと思ったからです。さらにゼミ見学で直感を確信しました。（フィーリングです！）

西野 愛由 さん
西村ゼミ● 2年 / 未経験者

大貝：研修準備はこれからですよね。

西村：今年は1学期のゼミのテーマが、そのまま地域研修の事前学習になっています。今年は平成大合併から10年目を迎える函館市に5年ぶりに行ってみようということで、市町村合併に関する文献や論文を輪読して勉強しています。地域研修では住民の方からヒアリングを行う予定です。

西野：実際に合併に関わった人にお話を聞く機会はこのようなことがないとできないし、函館も初めてなので、現地で是非いろんなことを聞いてみたいです。

大貝：地域研修は観光などで見えてくることとは違うので、是非いろんなことを学んで欲しいですね。

道場 真帆 さん
大貝ゼミ● 2年 / 未経験者

道場：私は道南の鹿部町の出身です。地域の抱えている問題などを町広報などで町民に知らせ、考えを集うような町でしたが、町民の意見等がきちんと反映されているのだろうかと、ずっと思っていました。もともとそういうことに関心があるので、是非地域研修をやりたかったのです。同じサークルの先輩から大貝ゼミの大変さを聞いていましたが、ゼミ見学時に発表準備をしているのを見て、是非このゼミに入りたいと思いました。先日、大阪の阪南大学、東京の文教大学、岩手の県立大学と一泊二日で合同ゼミを行ないましたが、これも大変刺激になりました。

大貝：研修にはどのような心意気で望みたいですか。今年は別海町で、3泊という日程ですが。

道場：研修先の別海は農業も盛んで、自分の出身地の水産業との違いや、6次産業化についての苦労話など重点的に聞きたいです。あまり経験はないのですが、ヒアリングなどでも素直に疑問に思ったことなどは、バンバン質問できるように積極的にいきたいと思っています。

大貝：頼もしいね！

――地域との新たな関係

大貝：そうそう、今年も「新・ご当地グルメグランプリ」にチーム別海のサポートメンバーとして参加要請が来ているので是非参加して欲しいね。昨年、地域研修が縁でサポートメンバーとして15人が参加して頑張ってくれたので、またサポート要請が来てるんです。

佐藤：ひたすらタマネギを切ったり、ホッキ貝をさばいたり、寝る間もなくとにかく大変でしたが、地域の特産品のホタテやホッキなどのPRに一生懸命で、全道、全国に発信をしている様子が学べて良かったです。でも辛かった！

西村：地域研修とは別なんですね。

高野：私たち西村ゼミの夕張映画祭への参加もそうですね。私は地域経済学科はこの大学でしか学べない学科なので、興味を持ち入学したんですが、アルバイト先の先輩が西村ゼミにいて地域研修の活動を教えていただき興味を持ち入りました。2年生の時に地域研修で夕張を訪れていて、地元の方から頑張っている映画祭のことは聞いていたので、何かこの町に貢献できることがあったらと思っていました。それで誘っていただいたんです。ゼミの2年生で行きましたが、初めての参加でもあり、分からないことばかりで5日間大変でした。ボランティアスタッフが不足していて、今年の2月も後輩たちが参加しました。

西村：市の財政破綻で市民中心の運営で大変なのですが、皆さん一生懸命で、何とかお手伝いしたいと。西野さんはまだ正式にゼミ生ではなかったけど参加して、イベントの司会まで担当しましたね。

西野：司会は他の方達とは別に単独行動であったり、ディレクターさんに怒られて泣きそうになったり大変でしたが、その分成長できたと思いました。将来女子アナになりたいので、とても良い経験でした！ 今

年も参加しようと思っています。

高野：連日朝早くから深夜まで大変でしたが、活動することで町の見方が変わるように思います。会場案内、受付、パンフ販売などをしたのですが、1日目1冊も売れなかったパンフレットが、自ら考えてポップを作ったり声掛けをしたりして、翌日から沢山売れるようになりました。人数が少ない分ボランティアでも指示を受けているばかりではなく、自ら提案して状況を変えていくことが大事だと切実に感じ、就職活動でも絶えずその経験談を話しました。

大貝：いい体験をしましたね。

西村：映画祭のボランティアは最初のきっかけは地域研修でしたが、地域研修の単位とは無関係で参加しています。ゼミや地域研修の枠を超えて、大学全体での関わりに広げていけるといいなと思っています。

――今後の課題として

大貝：地域研修をきっかけにして地域との繋がりや、関係を広げながら深めていく。こういう大学のあり方、研修のあり方が大事ではないでしょうか。単に研修に行けばいい、単位が貰えればいいということではなく、地域研修のこの10年の積み重ねの中でできた地域と大学との関係をもっと先に進めていくことが大切ではないかと思います。学生の皆さんにとっては、視野を広く、考え方を変えていくには地域研修がいい突破口になるのではないでしょうか。その意味で研修だけにとどまらず、地域の活動にも積極的に参加したというのは貴重な経験ですね。ゼミによっては報告書を作り公表するなどもしていますが、この先これまでの経験をどう生かしていきたいですか。

佐藤：1年生の時に議員インターンシップに参加し、十勝選出の道議会議員に十勝の状況を聞いていて、十勝に魅力を感じていました。大貝ゼミでも十勝について調査することになり、何かの縁を感じています。将来的には学んだことを生かすために十勝地方で働きたいと思っています。

道場：自分の住んでいる地域（鹿部町）はPRも頑張っていますが、渡島地方は函館しか知られていないので、もっとどうしたら情報発信ができるのか、広めていけるのかを学びたくてこの大学、学科を選びました。私の町は水産業水産加工業が盛んで、私の実家も水産加工を営んでいます。たらこを製造しています。人工着色をしていない自然のたらこなんですが、本州などでは知られていないので本当の北海道を知ってもらいたい、そのためにどうしたら良いかを地域研修で学んでみたいです。

大貝：今日は、地域研修を振り返り、参加した学生が実際何を学んできたのか、学びたいか、その魅力を是非語って欲しかったのです。経験を積んできたからかもしれないけど、皆よく考えているし、何かしようという意識があるのを感じました。

2013年地域研修報告会（中央は西村ゼミ4年猪俣紋佳さん）

西村：学生にとっては、きついくらいの方が成長できていいですね。実施する側として気を遣っているのは地域との関係です。地域の側には、若い人が沢山来るだけで嬉しいという面もありますが、それに甘えるだけでは持続的でない。学生達に愛情を持って成長の機会を作ってあげたいという地域の方々と、WIN-WINの関係を築いていきたいですね。そして、これまでの成果を総括・整理して、地域研修の次の段階へ進みたいですね。見学・視察タイプ、ヒアリング、アンケートなどの社会調査、地域づくり活動を実戦するようなタイプなど、効果を検証しながらうまく組み合わせていきたいですね。

大貝：研修は大学のカリキュラムの一環なんだけれども、学内での報告会だけではなく、「今回こういうことを学ばせてもらいました」という現地報告会を開いたり、地域に感謝の気持ちを表すことで信頼関係を作っていきたいですね。今日はどうもありがとうございました。

板橋君のぶらり ゼミ訪問 大貝ゼミナール

大貝ゼミでは、「地域経済の活性化」とは何であるのか、また地域中小企業が活性化に対してどのような役割を持っているのかを調査・研究しています。もちろんゼミやサブゼミを通じて文献輪読も行っていますが、「現場から学べ」が基本的なスタンスです。

地域企業調査は、地域研修がメインにはなりますが、日常的にも機会があれば実施しています。例えば6月14・15日には、阪南大学、文教大学、岩手県立大学と4大学合同ゼミ（教員含め31名参加）を実施しました。14日は、(一社)北海道中小企業家同友会にご協力頂き、小樽・余市地域、江別・長沼地域の7社に対して4グループに分かれて企業訪問、調査を実施しました。

訪問先企業は、次の通りです。

【小樽・余市エリア】

北海道ワイン株式会社、株式会社北王よいち、中野ファーム、曲イ田中酒造株式会社、チェリーハントインオオクボ

【江別・長沼エリア】

株式会社町村農場、マオイの丘野菜園山田農園、仲野農園

1グループ3～4企業を1日で訪問するかなりのハードワークでした。「地域資源の魅力をどこに感じているのか」、「事業経営におけるこだわり」、「今後の事業の展望や地域的課題」といった点について聞き取りを行いましたが、経営者の方々の生き様、プライドが言葉の端々から垣間見え、企業調査でありながら、自分自身を見つめ直す時間にもなったようでした。

15日は、各グループが企業訪問で何を学んだのか、午前中にプレゼンを作成してもらい、午後は報告会を実施しました。報告内容を見ている限り、2日間という限られた時間での合同ゼミでの企業調査でしたが、とても貴重な経験になったようです。同様の合同ゼミ・フィールドワークは、10月にも十勝で、愛媛大学、龍谷大学と合同で実施予定です。

仲野農園でのヒアリング風景

合同ゼミプレゼン発表

研究室の窓から

―新自由主義、オルターグローバリゼーション運動の潮流を総体として把握する――

大屋 定晴 経済学部准教授
おおや さだはる

［専門は社会経済学、グローバリゼーション研究］
●主な著書・論文に、『共生と共同、連帯の未来』（藤谷・尾関・大屋編、青木書店、2009年、共著）、「資本の地理的不均等発展」（歴史科学協議会『歴史評論』741号、35～49頁、2012年1月、単著）

社会経済学と新自由主義

私は一橋大学社会学部で学びました。そこは名前こそ「社会学部」ですが、学部創立者の一人である高島善哉がアダム・スミス研究者であったように、経済学を含む社会科学全般を学ぶ場でした。私は、高島、大塚久雄、内田義彦などの著作やカール・マルクスの『資本論』体系に触れ、現代資本主義社会を総体的に捉える視角としての社会経済学へと近づいていきました。

しかし、この理論的関心の一方で、現代世界の諸矛盾が実際どのようなものなのか、という問いも抱いてきました。冷戦体制の崩壊期、そして日本の「バブル」終焉期に学生時代を過ごした私は、ホームレス支援のボランティアをしたり、途上国にある格差の現実に接しようとブラジルに一年間留学したりしました。

現在の研究への転機は、そうした実践の積み重ねから出てきました。大学院在籍中の2002年、ブラジルで世界社会フォーラムが開催されました。これは、世界経済フォーラム（通称「ダボス会議」）に対抗する国際集会で、二年に一度、世界各地からＮＧＯや労働組合などの社会運動団体が数万人規模で集まり、世界の諸問題とその解決案を議論するものです。私は、あるＮＧＯのお手伝いとして参加したのですが、そこで「新自由主義」的グローバリゼーションという問題をつきつけられました。新自由主義とは、私的所有権や自由市場・自由貿易を前提にした民間企業の営利活動が、社会の富と福祉を増大させるという考え方です。1970年代以降、こうした思想が先進国を中心に支配的となり、それにもとづいて国家機能が再編される事態――新自由主義化――が世界各国で起きはじめました。これは、2002年当時の小泉政権期の日本では、「構造改革」と呼ばれた事態でもありました。すでに1980年代から累積債務問題を契機に国際経済機関主導のもと新自由主義化が進められたラテンアメリカ各国では、「経済成長よりも、むしろグローバルな環境破壊と格差社会化がもたらされた」として、批判の声が挙がっていました。私は、この声の国際的な広がりに刮目するとともに、グローバルな新自由主義化がどのようにして展開したのか、とりわけ、その経済的推進力は何だったのかと考えはじめました。

世界社会フォーラム（2005年）

その後しばらくして、デヴィッド・ハーヴェイの『新自由主義』の邦訳企画が、研究者仲間のあいだで立ち上がりました。ハーヴェイは1980年代に、地理学（空間）の観点から『資本論』の再解釈を試みたことで知られた人物ですが、彼もまた現在の新自由主義化を問題視し、その批判的検討を試みていました。ハーヴェイをはじめとした今日の欧米マルクス主義者が、新自由主義的グローバリゼーションやそれへの多様な対抗運動をどのように総括しているのか、そしてそれらの諸現象と資本の運動との関連をどのように理論化しようとしているのか。『新自由主義』の邦訳にたずさわった私は、このような問題設定へと誘われました。こうして私は、社会経済学の研究をさらに深める必要性に駆られたのです。

オルターグローバリゼーション運動と「地理的不均等発展」論

いま私は一方では、世界社会フォーラムに代表される異なる（オルター）グローバリゼーション運動を研究しています。こうした運動潮流は近年では、ギリシャでの緊縮財政反対運動や、アメリカのウォールストリート占拠運動などにもつながっています。

●デヴィッド・ハーヴェイの著作

他方で、これらの諸運動をどのように把握するのか。とりわけグローバルな新自由主義化と現代資本主義社会の展開との関連において、どのように理論化するのか。これがもう一つの問題です。これについて私は、マルクスとハーヴェイの議論を検討することから、この理論化の試みを「資本の地理的不均等発展」論として提示しようとしています。資本の運動の論理には、恐慌を時間的・空間的に置き換える傾向が内包されています。この置き換えは、空間的に自由に動く貨幣資本を土地固定資本の活用のために留めようとする領土間競争を誘発し、それが新自由主義化を推進しようとする政治的動機に接続します。他方で、領土間競争に際しては各地に固有な歴史・地理環境も影響し、ナショナリズムや宗教原理主義などを伴いながら、地理的に特殊な新自由主義化と対抗運動の多様性とがもたらされます。これらを総体として把握しようとするのが、ハーヴェイが提唱する「地理的不均等発展」論だと考えています。

この議論を、異なる（オルター）グローバリゼーション運動に関わる他の思想潮流――たとえばアウトノミア派や世界システム論派――と比較・検討する課題が残されています。また、「地理的不均等発展」論と、世界社会フォーラムなどの対抗運動に潜在する運動論的諸原理との関連も考えなければなりません。これらの課題をさらに追究するなかから私は、日本における独特な新自由主義化が同時に世界の問題でもあり、日本国内の運動が世界の諸運動と課題を共有していることも理解できるのではないかと展望しています。

［平成26年5月30日］1部ゼミ地域研修事前学習

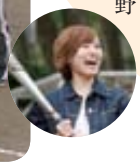
「西村ゼミ外部講師特別講義」

講師●NHK函館放送局記者 庄司 清彦 氏

西村ゼミ Ⅰ･Ⅱは今、夏の地域研修に向けて事前学習に取り組んでいます。今年の地域研修は「平成大合併：10年目の検証」をテーマに函館市で実施する予定で、函館市に編入された旧南茅部町、旧戸井町、旧恵山町、旧椴法華村などの地域で聞き取り調査などを行います。事前学習では、2000年代初頭に市町村合併を巡りどのような議論が行われたのか、当時強調された合併のメリットは実現したのか、合併した地域は現在どのような課題に直面しているのかなど、文献を通じて学習しています。この日はNHK函館放送局の庄司清彦記者（写真左下）をゼミのゲストにお招きし、道内における市町村の廃置分合の歴史、平成大合併で合併した地域が急速な人口減少に直面している状況などを講演していただき、西村ゼミによる調査に大変期待している旨、激励の言葉をいただきました。学生も、地域研修が単なるお遊びではない、社会的使命を帯びた本気の研修なのだと気づく、よい機会となりました。

［西村］

1部ゼミ対抗 ソフトボール大会



▲決勝戦を前に、大貝ゼミⅠ･Ⅱと小坂ゼミⅡ、大会運営の経済学部ゼミナール協議会のみなさん

今年のゼミ対抗ソフトボール大会は6月11日から18日まで月寒公園坂下球場で行われました。昨年と同様、整備の都合で片面しか使用できなかったことに加え、天候に恵まれず試合が順延を繰り返し、参加者がそろわないためにゲームが成立しないということが例年以上に多い大会となり、参加者、運営側ともに時間調整等にとても苦労しました。

全54チームが参加した大会の結果ですが、優勝は小坂ゼミⅡ、準優勝は大貝ゼミⅠ･Ⅱ、3位は野口ゼミⅡとなりました。決勝戦では、小坂ゼミⅡの超強力な打線が開始早々から爆発し、前半で大きく点差が開き、勝負あったかに見えました。しかし、中盤以降は大貝ゼミⅠ･Ⅱもじわりじわりと追い上げを見せ、白熱した好ゲームとなりました。試合結果は9－6、両チームの賑やかな応援も目立ちました。3位決定戦は、野口ゼミⅡと栗林ゼミⅠで行われる予定でしたが、栗林ゼミⅠのメンバーが揃わず、野口ゼミの不戦勝となりました。

［大貝］

From a Distance 2

「モントリオール／モンレアル」

●一條 由紀［経済学部准教授］

昨夏、ケベック州政府主催のフランス語教員向け研修に参加した。ケベックどころかカナダに行ったのもはじめてであった。よく知られているように、カナダは多言語国家だ。国の公用語は英仏2言語。だが、ケベック州の公用語はフランス語のみである。私が滞在したケベック州都モントリオールは、フランス語ではモンレアルと発音される。

モンレアル大学で行われた研修には、日本など外国からの参加者に加えて、カナダ国内の他州からの参加者もいた。その中に韓国系の女性がいた。夫といっしょに移住してきて、今はオンタリオ州でフランス語を教えているそうだ。研修中に出会ったギリシャ系学生によれば、移民でフランス語を教えている者はけっこう多いらしい。

カナダは多文化主義の国だ。それはモンレアルの街をちょっと散歩するだけでも実感できる。ケベックでは仏語話者がマジョリティだから、街で聞こえる言語も当然フランス語が多い。とはいえ、もちろん英語も耳にする。そして、イタリア語、ポルトガル語、中国語なども。

ケベックに民族間の対立がないわけではない。新移民の問題以前に、歴史的に英系住民と仏系住民は対立してきた。カナダからの独立を求める声もある。先住民族の問題もある。しかし、私がモンレアルで出会った人々は多様性をポジティヴにとらえていた。異なる文化がまざりあうことで新しい文化が生まれるからというのだ。

そういえばケベックでは移民の出自を持つ作家が多数活躍している。イタリア、エジプト、レバノン、ハイチ…。彼らのルーツは様々だ。近年は、中国、韓国、ヴェトナムなどアジア系作家も注目されている。アキ・シマザキという日系作家もいる。彼らのもたらす多様性はケベック文学を豊かにすると考えられている。

異なる文化を持つ人々が隣り合い、自然に行き交いながら暮らす町、モンレアル。繁華街を歩けば、イタリア、ギリシャ、ヴェトナム、日本などの各国料理店が並び、様々な出自の人々が楽しそうに食事をしている。いつかまた訪れたいと思っている。

モンレアルの中華街

［OB訪問］働きマン 13

Uターンで社会人入学、学生時代のアルバイトから本職として花屋に！生花業に就いたOBの物語

▲佐藤ゼミに招かれ講義を行う

鈴木 康洋さん
すずき　やすひろ

生活の中に花があると明るい気持ちになる。それが仕事として毎日、またたぶん家庭でも花に囲まれ潤いある日々を過ごしているのではないかと想像する「働きマン」本学部OBの鈴木康洋さんを訪ねた。

◀ 店舗で取り扱っている花を持って

学生時代のゼミ論文 ▶

社会人入学で本学入学

工業高校の建築科を卒業した鈴木康洋さんは、大学進学ではなく早くから就職を考えていた。そのために実業的な建築科を選択、卒業後はすぐに北海道を離れ、東京の大手ゼネコン系列の建設会社に勤めた。入社当初は現場の仕事をしていたが、その会社が併設していた、新卒者や海外から受け入れる研修生などが学ぶ職業訓練校に配属になった。助手から指導員にもなった。人に教えるということ、そのためには自分自身がもっと勉強しなくてはならないこと、指導員の仕事は楽しく充実していたという。

だがある時「このままこの流れで働いていて良いのだろうかという疑問を感じました。それなりの立場になり、順調な人生を歩めるのかと思いましたが、自分にはまだまだ知らないことも多く、もっと学びたいという思いが湧いてきたんです」。高卒で勤め始め、毎月貰う給料や税金、保険料などいったいどのように決められ、何のために使われているのだろう。社会の仕組みはどうなっているのだろうと、疑問が常に頭の中で巡っていたそうだ。

また、東京で働き出し5年になろうとしていたが、北海道に戻って働きたいという思いもあった。建設の仕事だけではなく、様々な可能性を考えたいと思い、そう考え始めた時に北海道生まれであるのに、北海道のことをよく知らない自分に気づいた。そしてまず北海道を知ることから始めたいと思ったのだ。

そのような時に、本学部の地域経済学科のことを知り興味を持った。魅力的だったのは夜間の学部があったことや社会人枠があったこと。受験、そして晴れて合格。2008年23歳になっていた。「3月に会社を退職し、実家の美唄から入学式に出席しましたが、雪が降っていたのを思い出します。これから大学生になるんだなあという感慨が湧いてきました」という。

特急列車通学で大学生活スタート、そしてアルバイト

美唄から毎日15時頃のJR特急スーパーカムイで大学に通う。「定期代は月額3万円ほどなので、アパートを借りるより安く済み、雪になるまではJR通学をしていました。札幌まで33分の時間で本を読み、今日は何を勉強するのかを考えながらの通学が楽しかった」。

年の暮れになり、短期のバイトをしようと探したところ、最初に目をつけたおせち料理の仕事は、電話をすると募集が終わっていて、次にその隣の欄にあった花屋の求人に応募する。全く花とは無縁で、身近にも花のある生活をしたことがなかったが、無事採用されて働き出す。これが面白い世界だった。花屋というと店先には色とりどりの花々が並び、美的なイメージだったが、働き出すとその裏側は別世界。卸売業もやっている会社なので花卉卸売市場に出入りしていると、大勢のセリ人がいて、熱気ある男っぽい世界。セリ場というところの活気がとても面白く興味を持った。徐々に北海道の花の生産地を勉強したり、生花業の世界が面白くなってきた。

働いていることと勉強がリンク

3年生になり、専門ゼミで選択したのが佐藤ゼミ。「佐藤先生のゼミは流通がテーマで、佐藤先生は本学に着任間もなかったこともあり、ゼミ履修者は私ひとりでした」。鈴木さんと佐藤教授、1対1の贅沢なゼミが始まった。アルバイトの仕事にもだんだん熱が入ってきた。市場への出入りは、ゼミテーマの「流通」と重なり俄然、勉強にも力が入った。ゼミや大学で学ぶこと、流通の仕組みなどが、すべて仕事という実践の場で現実的に目に見え分かってきた。経済学の「市場（しじょう）」と仕事の現場である「市場（いちば）」がリンクし、その関係性が実証的に理解できるという恵まれた環境だった。

卒業から就職へ

ゼミでの取組みは、1年間で「花卉流通の現状と可能性」という力作のゼミ論文にも仕上り、学内懸賞論文にも入賞した。佐藤教授と二人で早朝の花卉市場に出かけたり、文献を読み込んだりの二人三脚の成果だった。

「いつも図書館に通っていました。朝9時には図書館入り口に並び、開館すると真っ先にいつも使う机に向う。10人くらいはいつも並んでいました」という熱心さで、卒業式には成績優秀者として表彰されるまでになった。卒業後の就職は「本当はセリ人のような仕事に就きたかったのですが、年齢的なこともあり叶いませんでした。他にも選択肢はあったのですが、アルバイトから勤めていた現在の会社の社長が正社員採用として誘ってくれました。大学で学んだことが生かせていますし、今では大きな契約も任せてもらうなどやりがいを持って働いています」。ひたむきに取り組む姿勢が、この春課長職に任命され評価された。仕事が縁で同業の女性とも結婚、毎日が花のある生活を送っている鈴木さん、後輩たちへのメッセージ。「社会人を経験したから言えることかもしれませんが、税金、社会保障から街の商店街のことまで、どんなことでも自分の身の回りにあることに興味を持てば、それが授業の中で裏付け、理論付けされて分かる面白さがあります。そうすると、勉強でも就職活動でも辛いものではなく、楽しいものになるのではないでしょうか。そのことを大学で学んだように思います」

profile
1984年 美唄市生まれ
2003年 美唄工業高校卒業
　　株式会社マルチビルダー社入社
　　（2008年退社）
2008年 本学経済学部2部地域経済学科入学
2012年 本学部卒業
　　株式会社八幡屋入社

［平成26年4月25日］経済学会・開発研究所共催講演会

「国連平和維持活動と私―現場からの視座」

講師●国際連合PKO局政務官　吉井 愛 氏

国連平和維持活動（PKO）は、紛争地域の平和維持・回復・構築のために、国連が軍事組織を派遣し、停戦合意監視や和平合意実施支援、紛争予防、平和構築などを行う活動である。PKO派遣は冷戦期には18件であったが、その後急増し過去20数年間で50件余りにも達している。冷戦後に紛争が頻発したためだが、そうした中には民族・宗教紛争も多数含まれ、旧ユーゴスラビアやアフリカのルワンダ、スーダンなどでは凄惨な大量虐殺や民族浄化が起こり、多くの難民が生じた。

世界中で現在16か所に展開されているが、講師の吉井氏（写真左）が所属するアフリカのコンゴ民主共和国でのPKOは総勢２万５千人以上の超大型で、その任務は平和維持・構築にとどまらず、武装勢力を制圧する平和執行も担っている。吉井氏はそのPKO活動を日々の業務を通じて具体的に説明してくれ、PKO活動の意義・重要性も強く感じられた。日本から遠く離れたアフリカの大地で国際貢献に勤しんでいる吉井氏の活動に深い感銘を受けた。［野崎］

［平成26年6月28日］道民カレッジ連携講座

市民公開講座「グローバル『資本論』」

講座❶神山義治教授［写真1］
「グローバル『資本論』―どこまで来たのか、資本主義」
講座❷平野研准教授［写真2］
「社会民主主義と新自由主義―ブラジル・カルドーゾの従属」
講座❸大屋定晴准教授［写真3］
「資本の地理的不均等発展―デヴィット・ハーヴェイによるグローバル資本主義の展望」

6月28日、本学で市民公開講座が開催された。テーマはグローバル資本論。大型スーパー・量販店・コンビニが各地に進出し、地元の個人商店が姿を消す現象は、もはやめずらしくない。この現象は、大資本による小規模経営体の駆逐にとどまらず、小売店や商品の画一化、人びとの生活様式や仕事のありかたの画一化、そして正規職減少・非正規職増加といった雇用不安定と、同じ原理で起こっている。このように資本が席巻する現状は、日本国内でのみ生じているのではなく、企業の多国籍化、経済のボーダレス化という世界的現象の一部である。いうなれば、国境をこえ、かつてない規模で世界に展開する〈資本〉の時代が到来しているのである。講義では、私たちが日々それぞれの場で感じている「生きづらい」現実の背後にある世界規模の〈資本〉の展開を、３人の講師が、ときに原理的に、ときに現実的に解明してみせた。各講座によって、「資本」のグローバルな展開の断面図が示され、現代の問題群をのりこえる諸個人の協同的取り組みの大切さが語られた。教室を埋めた受講生は真剣な眼差しで聴講し、白熱した講演となった。質疑応答では、成長主義の限界や民主的社会づくりの可能性などをめぐって活発に質問が出され、市民の関心の高さが伺えた。今後もこうした機会を設け市民と学術コミュニティとの連帯を推進することが期待される。［川村・神山］

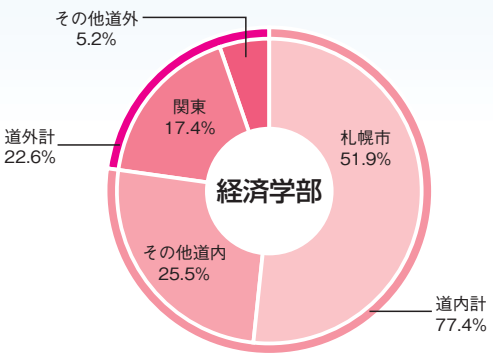
1

2

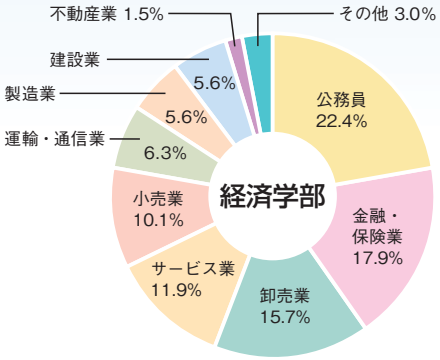
3

2014年 就職情報 平成26年3月31日現在

本社所在地別就職状況



業種別就職状況



過去3カ年の主な内定先

［経済学部のみ］　※公務員は合格者数

企業名	人数
北海道警察	26
札幌市役所	19
北洋銀行	14
日本郵便	10
セイコーマート	9
生活協同組合コープさっぽろ	8
ホクレン	8
北海道労働金庫	8
北海道銀行	6

公務員・教員登録状況 ［平成25年度 卒業生・全学部　平成26年3月26日現在］

名称		人数
国家公務員一般職		78
国税専門官		25
裁判所職員一般職		10
自衛隊一般曹候補生		7
警察庁警察官		5
北海道職員	一般	22

名称		人数
北海道	警察官	74
	女性警察官	13
札幌市職員	行政	41
	技術系	4
	学校事務	4
	消防	16

名称	人数
その他市町村	118
その他公務員（上記分類以外）※1	7
公立学校教員	30
国立大学等独立行政法人職員	89
総計	543

※1）大学別合格者公表のない試験によるもの（本人申告分を含む）。入国警備官・刑務官など。

キャリア支援センターの主な支援活動

- ○個別面談
- ○ガイダンス（民間・公務員）
- ○セミナー（面接対策・エントリーシート対策）
- ○就職講演会（民間）
- ○学内合同企業説明会
- ○筆記試験模試（民間・公務員）
- ○YG性格検査、適職検査（R-CAP）の実施
- ○インターンシップの斡旋
- ○資格取得講座／公務員試験対策講座
- ○オリジナルポータルサイト「ミナトコム」提供
- ○キャリアガイダンスの実施（1年次）

econ. No.30　2014. 夏・秋号
発行：北海学園大学経済学部　　制作：株式会社 ラボット
〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1-40　TEL. 011-841-1161（代表）FAX. 011-824-7729
http://econ.hgu.jp/　北海学園大学エコン 検索　E-mail：kyomu-za@econ.hokkai-s-u.ac.jp
R100 古紙パルプ配合率100%再生紙を使用